

駿河塗下駄・張下駄

○駿河塗下駄

江戸時代、静岡は、東海道の中心として各地の流行がそのまま伝わり、いろいろな履物が作られていました。

塗下駄は、明治 20 年（1887）に本間久次郎が、大衆向けの下駄に漆塗りを施した高級塗下駄を開発して、東京に出荷して好評を得ました。

塗下駄になって、材質の軽さに重点が置かれたことで、当時は静岡近くの豊富な安倍杉がこれに充てられていました。

この当時、下駄の木地製造の過程では、下駄職人が山に入って材木から木取りし、五部作（半製品まで作る）をしていました。漆塗りは漆器製造の片手間として、塗師屋が行なっていて、塗下駄専門の塗師屋の存在はありませんでした。

木地職—塗師屋—蒔絵など分業の家内工業的製造が徐々にとられていくのは明治 30 年以降のことです。

明治 45 年（1912）江尻の三島屋井上半蔵が、広島県松永の工場に倣い、機械力による下駄の製造を企て 4 月「清江下駄株式会社」を創立し、大量生産の道を拓きました。

大正時代になると輸出漆器から転換した職人たちによって、さまざまな創意工夫がなされて発達をとげました。

そして高級塗下駄といえば静岡といわれるほどの最盛期を迎えました。

○駿河張下駄

張下駄は、明治時代に下駄の表面に桐の柁経木（まさきょうぎ）張りを応用して製造されたのが始まりと言われています。

昭和 36 年（1961）に、デコラ張り（プリント木目紙を台に貼りポリエステル塗装仕上げ）が開発されました。昭和 40 年代はこのデコラ張りが静岡の張下駄の大きな特色であり主流でした。

現在、紙布（しふ）、和紙、ツキ板など様々な素材を張り分けや型抜きなど多様な方法を駆使して、個性的な下駄を作り続けています。

昭和の初め、「塗下駄工業組合か」ら柁張り部として独立し、「静岡柁張加工組合」が結成され、昭和 43 年には、地域により一班から五班までに分かれた 33 業者が加盟していました。

昭和 43 年（1968）8 月 19 日第 1 回柁張加工新作展を一番町の組合で開いています。